
狐付き

シンシンノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狐付き

【Nコード】

N1660BA

【作者名】

シンシンノ

【あらすじ】

狐に妙に敬われる主人公 白崎誠也は山で狐の嫁入りを目撃して異世界へ連れていかれる。
セーヤを主様と呼び連れ去った美しき妖狐に見守られながら修行や冒険者を通してセーヤの隠されたの力が覚醒していく。

処女作となります。気が向いたら生温かく見ていただけると嬉しいです。

1話1話が短いです。

寝坊

『ピーピーピー』

「ん．．．ん．．．」

不快な電子音が頭を揺さぶる．．．頭がボーっとしてる中音のする方に無意識的に手を伸ばす。

カツチャと音がして不快な音が消える。

「ん．．．これでゆつくり．．．」

再度心地よい世界へと旅立っていく。

不快な電子音を立てていた時計は午前7：00を指していた。

「ん．．．ゆつくり寝たあゝ」

清々しい朝だ。なんだかいつもより清々しい。「んゝ」と背伸びをして体を伸ばす。

「しかしたまに見るあの夢はなんなんだろうなあ？いやな感じはしないけどゝ」

とそんなことを考えていると不意にあるものが目に入る。

「！？！？」

あれ？なんで時計の短針が9の所にあるんだろう？

- - -
- - -
- - -
- - -

「いつもなら学生やリーマンでゴった返してるのに人が少なくて快適♪快適♪」

起きて寝坊したことに気付いてからの俺の行動は早かった。

まず携帯で学校に連絡して、

「あ・・・すみません…ゴッホ・・・朝から熱が出て・・・ちょっと病院に行くため今日は休みます。」

うん完璧。電話にでた担当の先生も

「白崎。無理するなよ！ゆっくり休んでしつかり治せ」

と言ってくれた。日頃から真面目な態度で授業を受けていた事が功を奏して全く疑われなかったぜ。（と言ってもまだ16歳で高校生歴半年くらいだが・・・）

学校では一応真面目に分類されるはずだ。成績は学年でトップクラス。運動神経もよく先生方からの評判も悪くはない。いやむしろいい方だと思う。

そんな俺こと『白崎誠也』がなぜ『完全に』真面目ではなく『一応真面目だと思われるか』という顔のせいだ。とはいっても顔が悪いということではなく、むしろ色白で整っていると見えるだろう。（若干目つきは悪いが）

問題は髪だ…髪の色が・・・生まれつき金色なのである。なんでも髪の色素が普通と違うらしい。

理由は不明なんだが・・・将来禿げたりしないよね？大丈夫だよな？

目つきの悪さと金髪のせいではっと見ヤンキーにしか見えない。でも話せばそんなことないと言わかってくれる。話せばだけど…

学校では教師はまあ『見た目はあれだが、中身は真面目』と思ってくれているようだが、同級生からは怖がられる。つというか避けられる。

小耳にはさんだ話の一部を抜粋するとだと・・・

『白崎さあなんか鬼島先輩を返り打ちにしたらしいぜ？』

『え？鬼島先輩ってあの『三校の鬼』って呼ばれてる鬼島先輩？』

『そうその鬼島先輩。なんでも鬼島先輩が白崎の髪と目つきが気に入らなかつたらしくて校舎裏に呼び出したらしいんだが、その後鬼

島先輩が帰ってこないから様子を見に行った先輩が一人で倒れてる先輩を見つけたらしい。」

『マジかよ！？白崎さんマジパネエw俺はあの眼を見たときから3人は殺してると思ってたね』

『マジで関わらない方がいいよなあ』

『だな。生徒指導の鈴木もビビって白崎にはなんもいわねえらしいからなww』

つとこんな感じ。いや鬼島先輩は・・・ただ単にいちゃもんつけられたから、論破したら殴りかかってきたのを避けたら自分で壁に激突してそのまま失神しちゃっただけなんだが・・・

ちなみになぜ俺がその場にいなかったかという人を呼びに行こうとしたらすれ違った人が失神してる鬼島先輩を見つけて騒ぎになったから逃げた。

だって・・・なんか怖いじゃん？

鈴木先生の話だって・・・別に俺が悪いことしてないのはわかってくれてるから何も言われねえだけだし・・・髪の毛の事は医者からの診断書を提出してるしよ。

まあ話がなんか長くなったがつまりは俺は学校では避けられていて、友達がいけないということだ。クソ・・・リア充爆発しろ。ちなみに家族もいない。つというか・・・もういない。

俺は幼いころじいちゃんに預けられてじいちゃんが育ててくれたんだが、そのじいちゃんも今年の夏に他界してしまった。両親は死んだとじいちゃんから聞いていたんだが、

死ぬ寸前に、

「おまえは本当は家の前に捨てられていたんじゃない。だからワシが育てた。」

とそんなことを言われた。えーっつと法律的にそれはどうなんだろう？ ありなんだろう？ まあじいちゃんのことだからどうかしたんだろう。

現に俺はじいちゃんに育てられたし。

友達もいないし、家族もないつまりは天涯孤独になってしまったんだなと思うと涙が出てきた・・・

つとそんなブルーな気持ちになって落ち込んでいるとアナウンスが聞こえてきた。

「次の停車駅は自然公園→自然公園→お降りの方はボタンにてお知らせください」

そういえばバスに乗ってあるところに向かっているんだった。気分を変えするために強めに停車ボタンを押す。

『バツチーン』強く押しすぎたせいで大きな音が鳴ってしまった。周りの目が痛い。おばちゃんそんなクズを見るような眼で僕を見ないで…

寝坊（後書き）

ん・・・１話どのくらいにしたらいいのかわからない・・・

動物自然公園

「ん〜やつぱりここはいいなあ〜。癒されるう〜」

「やべやつぱりライオンは迫力あるなあ」

「マジこの犬天使じゃねえ？このもふもふ具合連れて帰りてえええ」
「ちょwあの猿さかりすぎじゃねえ〜ただけやれば気が済むんだよ。」

もうお分かりかと思うが寝坊して仮病を使い学校休んだ俺がどこにいるかといえば、山の中にある『自然動物公園』である。「自然動物公園」動物がいっぱいる！！

まあつまりは動物園です。はい。

動物が大好きで大好きでしょうがない俺は月1くらいでここに訪れる。本当はペットを飼いたかったんだけど・・・じいちゃんが動物嫌いで飼えなかったんだよなあ…

じいちゃんが死んだ後も自分の事で精一杯だから買うことは諦める。

ライオン・犬・猫・象・猿などさまざまな動物を鑑賞しテンシヨウが上がった俺はいつもなら近づかないエリアに足を踏み込んでしまった。

そのエリアは…

キツネ

エリアである。キツネは嫌いだから近づかない。なんてことはなくむしろ好きだ。あの綺麗な瞳・りりしい輪郭・とんがってピーンと

立ててる狐耳・そしてなによりあのポリウムのある尻尾をももふもふしたいと思わないわけないだろ？

それなのになんで近づかないかといえば……この状況を見てもらえればわかると思う。

「なあお前たち。何がしたいの？」

俺が問いかけたのは、柵の向こうで大人しく座っているキツネ君たち。座っているだけならまだいい・・・なぜか俺の前に集まってきた。座っているだけなく並んでいるんだぜ？

しかもみんな頭を下げている。意味がわからないだろ？

今日は平日ということもあり空いてるからまだいいが・・・前休日
で人が多くいるときに同じ状況になった時は焦ったね。

その場を速攻で逃げたもん。

その後『自然動物公園に現れるキツネを従える謎の男』という新しい不思議のひとつが出来上がってというのは別の話。

問いかけをしたがさすがに返事はない。返事があっても困るが・・・俺はこれ以上不思議に尾ひれをつけさせないためにさっさとその場を後にした。

後ろから「ワワワワーン」という大合唱が聞こえてきた。お前たち知ってたか？ キツネは「コーンコーン」なんて本当は鳴かないんだぜ？

[illegible]

狐の嫁入り

「んゝこんだけ天気がいいと昼寝日和だねえ」

『自然動物公園』を後にした俺は山の遊歩道を散策して山の緩やかな斜面に寝っ転がり昼寝を楽しんでいた。今日は秋なのにぽかぽかして暖かい。ついうとうとしてしまう。

「ん・・・寝ちゃってたか・・・」

目を覚ましあたりを見回す。空は青から赤に変化していた。

「もう夕方かよ・・・早く帰らないとな。」

起き上がり服に付いた汚れをたたき落としていると不意に

「!?!」

『ピッチャピチャ』

「雨かよ・・・空に雲なんてねえのによ・・・天気雨ってやつか?」
そうばやくと俺は走り出した。

「クソ・・・雨がどんどん強くなって行きやがる・・・」

どんどん強くなつていく雨。視界も悪くなつていく。そんな中どこからか・・・人が歩く音が聞こえてきた。

「え?こんな山の中で人の歩く音?後ろからか?しかもこの音の感じだと少人数じゃなくてだいぶ多くね?」

雨の中でも聞こえてくる歩く音。気になつて誠也は振り向くと

「えええええ!!!????」

・・・なんだあれ?普通じゃねえだろ?俺はまだ夢でもみてるのか?そこには行列が・・・しかも普通の行列ではなく100匹を超すキツネの行列中盤には時代劇で見るような「籠」を担ぐキツネまでい

る。

言葉を失い、訳がわからない状態の誠也。そんな中、籠の窓？からこちらを見る視線を感じる。

そちらをみると白無垢姿の一人の少女と目が合う。

（白無垢かあゝ結婚するのかなあ？綺麗な人だなあ…いや綺麗というか可憐だあ…っと俺はなにを考えて！？逃げなきゃ！！さすがにこれはふつつじゃねえ…あれ？おかしい…）

誠也は逃げようとするが体が動かない。動かないというか…その女性から目が話せない。

（え？なんで？どうして？俺なにが起きたの？）

ふとその少女がにっこりと笑う。

（ああすごく可愛い。そしてなんだか懐かしい…体がふわふわしてきた…なんだろうこの暖かさ…なんか眠くなってる…）

誠也がそんなことを思っていると再度少女が笑い

「うふふ」

先ほどと同じく可憐にそして先ほどど違い妖艶に笑うと少女の唇が動いた。

「お迎えにあがりました。主様。」

誠也は意識を失った。

- - - - -

狐の嫁入り（後書き）

次からついに異世界です。

1話が短いな・・・次からもう少し延ばすようにした方がいいのかな・・・？

全然方向性もまだ決まっておりませんが、よろしければ生温かい感想をいただければと思います。
よろしく願いいたします。

混乱そして会合

目が覚めるとそこは・・・和室でした。

「え…ええつと・・・どこここ？」

全く見覚えのない部屋。布団から上半身だけ起き上がらせながら誠也はあたりを見回す。

（おおゝあの掛け軸高そうじゃね？）

（あの壺なんだよ！？明らかに素人の俺でもわかる高級感漂ってんじゃないん！？）

（どれか一個もらってもいいかな？貰えれば1カ月の食費には困らないんじゃないかね？わからないけどきつと）

（この布団ももふもふしててすげえきもちいい。おやすみなさい。）

「つと現実逃避してもしようがないよな・・・えつと何で俺はここにいるんだろ？」

寝起きで働かない頭を回転させて記憶を蘇らせる。

「昨日は・・・朝寝坊して・・・バスに乗って…自然動物園に行つて・・・山で昼寝して・・・」

ここまではまあいいだろ。問題はその後

「夕方昼寝から起きたら、狐の行列を見かけ籠の中にいる可憐な少女と目があつたらここにいた・・・」

ハイ…完全にOUIです。おかしいです。

少女と目があつて気を失ったというのはまだいいだろ…

狐もまあまだいいでしょう。

山だし狐がいてもおかしくはないんじゃないかね？あの山に狐がいるって話は聞いたことないが・・・

きつと地球温暖化のせいで生態系とかがおかしくなってるんだらう。

後問題は、その狐が行列を作つて白無垢の少女を運んでたことだよな……

（頑張れ！俺の頭！！！頭をフルに働かせて納得できる理由を思いつかせるんだ！！！！）

無理でした。

「あつ!？」

「きつと夢だ！……きつと山で寝た俺が夢を見てそのまま寝ちやつてた俺をたぶんどうかの優しい人が家まで運んで看病してくれたんじゃないね？」

16

狐も行列も美少女もきつと夢だ。美少女が夢なのは悲しいがそれはしょうがないだろ。

そう納得しかけた誠也の頭にいやもう一ついやな可能性が脳裏に浮かぶ。

「もしかして・・・俺の頭がおかしくなったんじゃね？」

考えたくはない・・・しかし可能性は捨てきれない。

あ・・・もしかして今から黄色い救急車（都市伝説）が迎えにくるんじゃね？

（精神病院ってパソコン使えんのかなあ・・・）

（食事のメニューが嫌いなもんばかりだったらどうしよう。）

（かわいい看護婦さんとかいねえかな・・・）

そんなどうでもいいことを考えていると、「トントン」と襖が他叩かれる音がする。

襖の向こうにいる人から声がかけられる。

「主様起きられましたでしょうか？入ってもよろしいですか？」

「あ・・・はいどうぞ。」

反射的に答えてしまった後に誠也は思う。

（・・・すごく綺麗な声だなあゝっていうか主様ってなんだろ？なんかこの家のしきたりとかなのかな？）

「失礼いたします。」

襖が開く。

「お加減はいかがでございますか？主様。」

入ってきたのは年の頃にして13〜15歳くらいの少女でした。し

かも昨日眼が合った白無垢姿の少女。

（ああ今日は・・・普通の着物すがたなんだなあ。）

（あれそうするとこの人が俺を助けてくれた人なのかな？間違っても看護婦さんってわけじゃないよね？）

（髪の毛の色が銀髪なのは地毛なのかな？すごく綺麗だけど）

（綺麗な赤い瞳だなあ。頭の上についてる耳もすごくキュートだ）

（あれ？今俺なんか変なこと考えなかった？なんだろう？）

「あのお？ご主人様？もしかしてまだお加減がよろしくないのですか？」

誠也が考え事をしている間に近くに寄ってきて心配そうに顔を覗き込んでくる美少女。

「いええ！？もう完全にだいたいじょうぶですう！！」

考え事をしたため少女が近づいていることに気づいていなかったから、慌てて返事をしたため声が裏返って変な声が出た。

死にたい・・・

「それはよろしゅうございました。お腹が空かれていますことでしょうか？今からご飯をご用意いたしますね。」

そういつて振り向き部屋を出て行くとする少女。

「！！！！？？？？」

その少女後ろ姿をみて誠也はきづいてしまった。違和感の正体に・・・

「狐耳にしつぽ！？？」

そうその少女の頭にはピンっとはった耳。お尻の付け根の辺りからは2本のもふもふとした銀色の尻尾が生えていた。

その声にが聞こえたのか少女が上半身だけ振り返りながら言った。

「妖狐族です。」

その顔には年に似合わない妖艶な笑みが浮かんでいた。

混乱そして会合（後書き）

尻尾が2本なのには意味があります。

混乱そして会合2（前書き）

見事に話が進まない・・・

混乱そして会合2

妖狐族と名乗った少女がでていつてから、誠也はいまだに布団から上半身を起きあがらせた状態のまま、混乱していた。

（と、とりあえず俺を助けてくれたであろう、あの少女の事を整理してみるか。）

金色の頭を右手で掻きながら誠也は考える。

1 ・中学生くらいの着物姿の美少女

2 ・狐耳に2本の尻尾

3 ・銀髪・赤い瞳

4 ・俺の事を『主様』と呼ぶ。

5 ・狐の行列に籠で運ばれていた。

（特徴としてはこんなもんか。）

5つほどの情報を頭に思い浮かべ誠也は考えを巡らせる。
混乱する頭で考える。

（1 ・美少女についてはとくに問題はないよな。日本人だし着物をきる習慣の家だったあるだろ。）

（2 ・狐耳に2本の尻尾か・・・これはなんだろう？そういえば...
数年前になんか動物の尻尾型のアクセサリーが流行ったような気が

する。

狐耳にしても、都内の某電気街では猫耳とかが流行ってるって聞いたことがあるような。つまりは作り物か？)

(3・銀髪かあゝ最初俺が地毛で金色だから納得したけど、普通に考えたら染めてるって考えるのが自然か？赤い瞳に関してはカラーコンタクトかなにかだろう。)

(4・俺が『主様』ねえ…うん。ねえな。呼ばれる理由がない。少なくともあの少女とは初対面だしなあ。なんか懐かしいような感じはしたけど…たぶん気のせいだろう。

この家のしきたりか又は、あの子の趣味の問題だろうな。)

(5・狐の行列と籠…きつと俺の見た夢だな。それしかない。)

そして考えた末に誠也は一つの回答に導きだす。

「妖狐族とも言ってたけど…」

(まさか…いやこれはあれか…噂に聞く、まさか実在するとは…年もたぶん丁度そのくらいだし、それしか考えられないよな。)

誠也の顔には驚きそして戸惑いの表情が浮かんでいた。

そしてその回答が頭の中で確信にかわったとき、誠也はぽつりと呟いた。

「…厨二病患者。」

誠也はすぐく残念そうに顔を歪ませる。

(あんなに可愛いのになあ…まさか現代社会の闇があんなかわいい

子まで侵略しているとは・・・この国は大丈夫なのか？)

そこまで考えてふとあることに気付く。

「えっと・・・俺もしかして痛い子に助けられちゃった？」

(やべえ・・・どうしよう…あのまま山で寝てたら多分おれは風邪とかひいてたよな？もしかしたらもう秋だし昼は暖かったとはいえ一歩間違えば死んでた可能性も・・・)

もしかして命の恩人になるんじゃないかね？もしかして話を合わせたほうがいいのか？)

誠也が状況を整理していると不意に、

『トントン』

再度襖が叩かれる。

「主様、失礼いたします。」

そついうと徐々に襖が開いて行く。襖が開ききると少女は正座姿のまま三っ指をつき、

「ご食事のご用意ができましたのでお迎えにあがりました。」

そついつてから少女は顔を上げる、やはり先ほどの狐耳の少女だった。

誠也はその姿をみて立ち上がると思わず、

「う・・・うむ。苦しゅうない案内するがよいでござる。」

その反応に少女はクスツと笑顔を見えると立ち上がり、

「では主様はまだこの屋敷にお詳しくないとおもいますので恐縮ながら私がご案内いたしますので、ついてきてくださいませ。」
そういうと少女は誠也が歩きだすのを見届けると後ろを向きになり、優雅に歩きを進める。

先を行く少女の尻尾を眺め誠也は一人ひとり思いを馳せる。

（さすがに…『う…うむ。苦しゅうない案内するがよいでござる。』はねえだろ…どここの似非な公家だよ…）

誠也は若干うつむきながら先に歩く少女についていくのだった。

混乱そして会合2（後書き）

ノリで書いてみたけどあんまり文才はないな・・・

こんな中途半端な作品を読んで下さる皆様に心より感謝を申し上げます。

葛藤（前書き）

やっぱり話が進まない・・・

葛藤

食堂？へと案内すべく先を歩く少女の1、2歩後ろを無言で歩きながら無誠也はいままでの人生で最大級の試練を迎えていた。

（・・・やべえよ・・・どうしよう・・・まさか飯を食いに行くだけのはずなのに、こんな罠が仕掛けられているなんて・・・）

どうしても視線をそこから外すことが出来ない。

前を歩く少女その少女が一步步くたびに、

『ユサユサ、ユサユサ、ユサユサ、ユサユサ』

お尻の付け根辺りから飛び出しているふさふさしてとても肌触りが良さそうな長さ1mはあるつかという2本銀色の尻尾が揺れる。

（まじい・・・本気で触りてえ・・・あの動きと大きさは反則だろ・・・）

（落ちて着け俺・・・あれは作り物だ・・・本物じゃないんだ。）

誠也は己に心の中で言い聞かせる。

『ユサユサ、ユサユサ、ユサユサ、ユサユサ』

（くそお・・・作り物だって分かっているけど触りてえ！！！！あのユサユサ揺れる豊満なしっぱをモフモフしてえ！！）

その時誠也の頭の中で欲望が具現化した悪魔が囁く。

<もう触っちゃえばいいんじゃない？きつとすぐフサフサしていい気持ちいいよ？>

（そ、そうかな？そうだよな？…ちよつとくらいならいいよね？）

誠也の心が欲望に負け、行動に動こうとしたその時、別の声が頭に響く。

ダメだよ！！女の子に勝手に触るなんて！！セクハラだよセクハラ！！セクハラで済めばいいけどもしかして、強姦扱いになっちゃうかもだよ？通報でもされたら、目線入りの写真がニュースに流れる事になるかもしれないんだよ？いいの？ほんとにいいの？

（え…さすがにそれは嫌だ…嫌すぎる。ありがとう天使君。僕を止めてくれて本当にありがとう！）

己の理性が具現化した天使に感謝を表す誠也。

<でもさあ…作り物って結論だしたわけじゃん？作り物のしつぽを触ったくらいじゃセクハラにはならないかなあ？

だから触っても平気だって。気持ちいいよ？モフモフだよ？作り物だとしてもモフモフは嘘を付かないよ？いいの？本当にいいの？触るなら今だと思うよ？>

（そ…そうだよな？作り物だしちよつとくらい触っても大丈夫だよな？）

悪魔の言葉に心が揺れる誠也。

たしかにあのしつぽが魅力的なのは僕も認めるよ！でも勝手に触るのは良くないよ！たとえ作り物だとしても、作り物だから大丈夫

なんて保証はどこにもないんだしさ！それに勝手に触られるのあの子の身にもなってみなよ？きつと悲しむよ？悲しませたくないですよ？

（たしかにそうだ！僕は何を迷っていたんだ。ここは我慢して後で触っていいか聞いてみよう。それが一番いいはずだ。）

<本当にそれでいいんだな？・・・っち。後悔してもしらないからな！！>

頭の中で悔しがる悪魔。

さすが誠也君だよ！！僕は君を信じていたよ！
満足そうに笑を浮かべる天使。

（ありがとう天使君、君のおかげで僕は間違いを犯さずに済んだよ！！）

何度目かわからないお礼を頭のなかでいう。

そのときだった。

『フワァ、フサフワァ』

手をものすごく気持ちのいい何かが当たる。思わず、その気持ちが
いい物を掴んでしまう。

頭の中で悪魔がくよっしゃ！>とガッツポーズを取る。逆に天使は
頭を抱えてしまう。

・・・少女の尻尾でした。

前を歩く少女も急にしつぽを掴まれたためか、

「きゃ!？」

咄嗟に可愛らしい声を上げてしまっている。

だが、今の誠也にはそんなことは関係ない。もう止まらない。一度掴んだしまったしつぽを無意識に離すまいと抱きかかえながら、なで上げる。

『ナデナデナデナデ、モフモフモフモフ』

どうにか悪魔の誘惑に耐え、理性を取り戻した誠也だったが頭の中で悪魔と天使の戦いが繰り広げられていたため、少女との距離が近づいていることに気がついていなかため、前を歩く少女のしつぽに触れてしまい理性が効かなくなった誠矢の姿がだった。

(すげえなにこれ!？すげえモフモフで気持ちいい!!ずっと触つてたい!!)

『モフモフ、モフモフ、モフモフ、すりすり、すりすり、モフモフ、すりすり』

「ああ、あ…主様きゅ、こんなところで急にな、何を…。きゃ!？そんなに掴まれたら…ああ…主様ま、まだ昼間でございます。アアン。わ…私、しつぽは弱いんです。主様お許し下さい。ご堪忍お〜。主様あ〜〜〜!!!!」

少女が頬を赤く染めながら恥ずかしそうに懇願するが誠也にその声は届いていなかった。

5分後頬を赤めながら少し涙目になっている少女の前で土下座をしている、誠也の姿がそこにあった。

申し訳なさそうに頭を下げ続ける誠也。だがなぜかその後ろ姿はどこか満足げだった。

葛藤（後書き）

なんたる…話を進めようと思って書き始めるんだけど…
妙に脱線してしまう。

話が進まなくて本当に申し訳ございません。

読んで下さった方。評価を下さった方。そして感想までいただきまして、本当にありがとうございます。

話しはなかなか進んでおりませんが・・・少しずつでも進めていくかと思しますので、よろしかったらお付き合いいただけますよう、よろしくお願い致します。

片鱗（前書き）

相変わらず短いです。

片鱗

廊下には土下座をしている少年の姿とその前で膝を立てながら困惑する少女の姿があった。

「本当にすみませんでした。」

誠也はいまだに謝り続けていた。

自分で言うのはなんだがさすがにあれはないだろ…

いくら咄嗟的に触れてしまったといっても相手はまだ見た目15歳にも満たない少女である。

その少女が嫌がっているにも関わらずに触り続けてしまった。

「主様もうそのことはお気になさらずに。お顔を上げてくださいませ。主様にそのように頭を下げられますと私も困ってしまいます。私もいきなりでしたのでびっくりはして変な声をあげてしまい申し訳ございませんでした。」

少女も謝る。少女が謝るのはおかしい気もするが、本人は気にしているようだ。

「とりあえず、食堂に向かいましょう。いつまでもここでこうしているのもなんですから。さあお立ちになってくださいませ。」

そういうと少女は誠也の手をとりながら立ち上がる。

少女に引っ張られるように誠也も立ち上がると、なにも言わずにそのまま少女につられて歩きだす。

誠也は少女に引っ張られて歩きながら、少女と自分の手が繋がれているのを考え深げに眺めている。

（すべすべしてるし一本一本の指が細い。それになんかあったかい・

・・・これが女の子の手か。じいさんのしわしわでゴワゴワして手とは全く違うな・・・。）

家族は祖父しかおらず、学校では誠也には友達と言える存在もなく言うならば浮いていた。そんな誠也にガールフレンドなどいるわけがなく、そのため女の子と触れあうことなど皆無であった。学校生活してる上で、異性と手をつなぐ機会くらいあると思われるかもしれないが、誠也の通っていた学校は昔はフォークダンスなどもあったようだが、父兄からなにかクレームがあつたようで異性とダンスを踊る事などなくなっていた。古き良き文化というものはどんどん失われていくものである。

そこでふと少女の足が止まる。ついで考え事していてなされるまま引つ張られて歩いていった誠也の足も止まる。

「主様、こちらが食堂となります。」

少女が食堂の入口の脇に立ち誠也の入室をうながすのだが、誠也は部屋に入ることなく少女と一緒に入口の脇に立っている。

（あのしつぽをモフモフするのもよかったけど、こうして手をつなぐのもなんか安心もんだなあ〜）

「主様どうかなさいましたか？」

反応がない誠也の様子を心配する少女。そのまま誠也の目線の先に自分も目を向けると、

「っ！？」

慌てて誠也の手から自分の手を放す。少女は誠也と手をつないだまま歩いていていたことを全く意識していなかったようだ。

（あ・・・）

誠也は自分の手が少女の手から解放されると、自分の手を開いたり閉じたりする。なにか感触を求めるように。そこに少女から声がかかる。

「あ・・・主様も…申し訳ございませんでした。」

勝手に手をつないでいたことを謝っているようだ。その後少女はポツリと漏らす。

「・・・主様もお気づきになられているのでしたら、言うてくだされば良かったのに・・・。」

そういう少女は、いつものように幼い見た目の割に大人びた印象ではなく年相応な少し照れながら拗ねたような表情をしていた。

先の時間、誠也に尻尾を触られた際にもこれに似た照れたような表情をしていたのだが、その時は誠也もトランス状態だったために気づいていなかった。

そんな少女の愛くるしい顔を見ながら誠也は思ったことをそのままいう。

「ごめんね。君の手があまりにこちよかったから、放したくなかったんだ。」

そんな誠也のストレートな言葉をうけ、少女の顔がより一層に赤くなる。さらに誠也は続ける。

「あといつもの大人びた表情もいいけど、今みたいな表情もすごくかわいくていいと俺は思うな。」

そんな誠也の言葉の攻撃（？）をうけて、

「はう」

少女は足から崩れて行きそのまま丸くなってしまった。

「え？どうしたの！？大丈夫！！！？」

誠也の心配する声はもう少女にはとどいていなかった。

ここに将来、その端正な顔と無意識な言動にて『女の敵』と言われるようになる誠也の才能（？）の片鱗が垣間見える。

もちろん誠也本人は無意識に行っているため、自分の言動がどういう影響を相手に与えているかは知る由がなかった。

食堂を目の前にしながら誠也がご飯をありつけるのは、まだもう少し時間がかかりそうである。

片鱗（後書き）

とりあえずの投稿です。

相変わらず短くて申し訳ございません。

『一回ごとに話が進まないのは文が短いせい』ということに気づきました…。

とはいえ文才がないせいも長く書くのが苦手なようで、ゆっくり進めて以降と思います。

できる限り早く続きを書くように頑張りますので、何卒ご容赦ください。

今回も読んでいただきましてありがとうございます。

この手に掴んだもの（前書き）

今日こそは話を進ませる。そんな思いでPCの前に座りました。
結果は・・・多くは語りません。ご覧下さい。

この手に掴んだもの

「狐なのにアヒルとはこれいかに・・・」

誠也は目の前で目は開きながらも、小さくなっている狐耳の少女を眺めながらそう漏らす。急に崩れ落ちて行った少女はそのまま足をハの字型にして座り込んでしまっていた。俗にアヒル座りと言われる形。その後ろでは2本の尻尾が『ゆらゆら』というよりも『ブンブン』っと表現したほうがいいのではないかと思うくらいにすごい勢いでゆれている。

反応がない少女を前にしてそんなどうでもいいことを考えてしまう。

（つとこんなことを考えてる場合じゃないよなあ。）

「ねえちよつと君大丈夫？」

誠也は軽くうつむきながら座りこんでしまっている少女に合わせるようにしゃがみ込むと、少女の顔の前に手を持っていき振りはじめ

「もしもし？ん・・・やっぱり反応がないな・・・」

振っていた手を止めて少女の顔を覗き込む。誠也は覗きこんだ瞬間一瞬『はっ』つとする。

（やばいくらい可愛いんだけど・・・可愛いんだと・・・いきなりこの表情はどうなんだろう・・・）

誠也が少女の顔を覗き込むと、少女は目を煌めかせながら、頬を緩ませながら、にやにやと笑っていた。

自分の容貌や言動のせいで少女がそんな状況に陥ったとは思えない誠也は、『いきなり突拍子もなく、発作的に』こんな状態に少女が陥ったと思ってしまった。

（やっぱりどこか変った子みたいだな・・・でもまあいつまでも廊下に座らせておくわけないはいかないよな・・・とりあえずその食堂に連れて行くか。）

そう結論付けると先ほど少女が誠也にしたのと同じように（立場を逆だが）しながら少女の手を取りながらひっぱるように誠也は立ち上がる。

「よいしょと!!」

思わず誠也からそのような声が漏れる。

少女は特に抵抗はしていないようだ、体に力が入っていないのか妙に重たく感じる。女の子に重たいというのはどうか？と言うところなのだが、いくら少女が小柄といっても自分で立ち上がる気がない人間を引っ張り上げるのは一苦勞である。

「おおつと！？危ない!？」

いまだに反応がない少女を無理やり立たせようとした為か、少女はバランスを崩して横に倒れそうになる。

（手をつないでるだけでは支えきれそうにない・・・）

誠也はそう一瞬で判断すると、咄嗟的に繋いでいた手を放すと少女の横に飛び込むと少女を抱きかかえる。その状況を誰かが見ていたらきつと目を見開いていたであろうというスピードであった。その後、

『ドンっ』『むにゅ』

木張りの床が鈍い音を立てる。

倒れかかる少女の横に飛び出しながら庇うために少女を横から抱きしめるか形で両手を使ってしまっていた誠也は受け身も取れずに背中から床に叩きつけられた。

「つつ・・・」

誠也の顔が苦悶に歪む。

そんな誠也の苦しみと努力を知ってか知らずか、少女は抱きかかえられながら倒れこんだ際のショックで自我を取り戻す。

「・・・っは！？主様あ！？いかなさいましたか！？」

自我を取り戻した直後に聞こえてきたのは、主の苦悶の声。少女は思わず叫んでしまう。

「つつ・・・何でもないよ…大丈夫だよ。」

そういうと痛みをこらえながらも、笑顔を作るために手に力を込める、

『むにゅッ』

そうして誠也は誠也は微笑む。

…あれ？なんかさっきからおかしい感触が左手を包んでいる気がする。誠也は確かめるように再度左手に力を入れる。

「むにゅっ」

左手にジャストフィットするような感触。触っていると幸せな気持ちになってくる。

そこで誠也はふと気付く、

（まさか…これは・・・）

誠也の背中に思わず冷や汗が流れる。

恐る恐る誠也は自分の左手に目を向ける。そんな誠也の目線に釣られるように少女も目を誠也の左手に向ける。

そこには…

少女の胸を鷺掴みしている誠也の左手があつた。

少女を庇って抱きしめる際に左手がちょうど胸に行ってしまったていたらしい。

誠也は状況を理解すると・・・その小ぶりながらマシュマロのような柔らかさをもつ胸の持ち主に顔を向ける。

少女は『キョトン』としていた。いまいち状況が理解できずに混乱しているようだ。

「え、えつと。わざとではないんだよ?」

誠也の思わずそんな言葉がでる。

そんな誠也の言葉のあとやっと状況を理解したのか、少女の口から

「キャーーーーー!!!!!!」

この日一番の叫び声が飛びだした。

この手に掴んだもの（後書き）

ご覧いただきましてありがとうございます。

そしてすいませんでした。

今回もまた話しが進みませんでした・・・

おかしいな・・・まえがきにも書いたとおり進ませるつもりで書き始めたのに・・・

話しが進まない＆筆が遅いのは特徴のようです。

こんな作者で申し訳ないのですが、もしよろしければこれからもお付き合いいただけますようによろしくお願いします。

追記 おかしい。ヒロインはどこに向かっているんだろ？こんなヒロインでいいのだろうか・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1660ba/>

狐付き

2012年1月13日02時45分発行